
きもち、ひんやりと

冥界寺吹雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きもち、ひんやりと

【Nコード】

N5163F

【作者名】

冥界寺吹雪

【あらすじ】

内輪の企画で書いた小説。ほんわかとした雰囲気の中に温かいモノを詰めました。読み終わってちよつとでもあったかい気持ちになつてくれればなあなんて思います。

（前書き）

時期設定としては、紅霧事件の少し前あたり。

人間の世界とは少し違う、近いようでとても遠いところ。人間の世界からは絶対に見ることができない、幻想郷という場所があります。人間も少しだけ暮らしていますが、妖怪や妖精さんの方が断然たくさん暮らしています。人間の世界よりもずっと自然がたくさん残っていて、人間にとってはとてもものどかなところですよ。

そんな幻想郷のすみっこに、大きな湖があります。そこにはいつも霧がかかっていて、その上を飛ぼうとする人はまずいません。そんな湖を根城にするのが、たくさん妖精さんたちです。人間も妖怪もほとんど訪れることがないから、襲われる心配ありません。妖精さんたちにとってこれほど住みやすい場所はないのです。

その湖の辺に、一匹の妖精さんがいました。淋しそうに膝をかかえて、頭を埋めています。ここの妖精さんといえば、いつもは皆明るくて活発です。こんなふうに悲しそうにしている妖精さんは滅多にいません。

「どうしたの」

私は聞きます。

「いじめられたの」

妖精さんは答えます。

「誰に？」

「見たことない妖精」

「大丈夫？」

「大丈夫」

その妖精さんは泣きながら答えてくれました。そんな妖精さんの姿を見ているとなんだか私まで悲しい気持ちになってきます。私の心は音叉のように他の心と共鳴しやすいのです。湖の霧が一層深くなってきました。私は答えます。

「案内してくれないかな、その妖精さんのところに」

妖精さんが埋めていた顔を上げます。緑色の長い髪が印象的な美しい妖精さんでした。いつも湖で元気に遊んでいる姿を思い出します。

上げた顔を一回、縦に振りしました。霧を纏った風が緑の髪を揺らしました。

妖精さんはその背中に生やした立派な翼を羽ばたかせ、霧の中に突入します。見失ったら大変です。私も大慌てでついていきました。しかし、そんな心配は無用でした。その緑色の長髪は霧の中でもよく見えます。とっても離れない限り見失うことはなさそうでした。

突然、あれだけ濃かった霧が晴れていきました。水面が高いところ

からでもはつきりと見るができます。こんなことは初めてです。妖精さんが身を寄せてきます。どうやらいじわるな妖精さんのご登場のようです。

「なんだよなんだよあんたは？あたいの場所に勝手に入ってきて」湖面から叫んでくるそのいじわる妖精さんはぐんぐんと近づいてきます。それに比例するように、どんどん寒くなってくるのを感じます。

「なんだ、さっきの弱虫も一緒か。また凍えにきたんだな！」

「ひっ・・・」

私に寄り添う妖精さんは身を一層小さくします。とっても怯えている様子です。いじわる妖精さんは、短い水色の髪に細かな氷の結晶をつけ、美しい氷の剣のような翼を広げています。その容姿はまさしく氷の妖精といったところ。その美しさに私はつい見とれてしまいました。

「んであんたは？人間・・・じゃなさそうね。まあいいや、早くどっかいっちゃいな！」

いじわる妖精さんが言うと、さらに寒さが増してきます。でも、そのいじわる妖精さんはそれ以上近づこうとはしません。こんなに強い冷気が操れるなら、もっと近づけば凍傷くらいは負わせられるでしょう。しかし、いじわる妖精さんはまるで自分の周りを線で区切

っているように身を動かそうとはしませんでした。

「やい、なんとか言ったらどうなんだ！あたいが本気を出したらあんたなんか一瞬でカチンコチンに出来るんだぞ！」

その声、表情。全てにおいて私は妙な違和感を覚えたのです。ずっと昔の、私の記憶にメスを入れられるような感覚でした。しかし、そのもやもやが何かを突き止めるまでには至りません。とてもどこかしいです。

だから、私はいじわる妖精さんに聞いたのです。

「どうしてあなたは、妖精さんたちをいじめるの？」

簡単な質問でした。しかし、いじわる妖精さんは何も答えません。あれだけ威勢のよかったのが突然意気消沈。思わず、私の後ろに隠れていた妖精さんも顔を覗かせています。

「あたいは・・・ここが気に入ったから。だから、あたいの縄張りに近づいたやつを追いつめてるだけ！」

長い時間を空けて、漸くいじわる妖精さんは答えます。答え自体はともありきたりなものでした。しかし、それでも私の心のもやは次第に晴れていくのです。そして、もやが晴れるにつれて懐かしいという感情が心に注ぎ込まれていくのです。

私は人間でした。過去形です。今は立派な幽霊をしています。

勿論、突然幽霊になったものではありません。ごくわずかな人間生活を送り、そして死をもつてして漸く幽霊になることが出来たのです。幽霊は人間からはとても怖い存在です。昔から恐怖の代名詞です。でも、人間なんかよりもずっと長生きですとお気楽に暮らすことができます。それが普通の幽霊なら、の話ですが。

私の場合はちよつと特別でした。人間にも、稀に体の一部が不自由な子どもが産まれてしまうことがあります。それと同じようなものです。

私には、生き物に死をもたらす能力があつたのです。

今だからこそ自由に使いこなすことが出来ますが、幽霊になりたてほやほやの頃は十分に扱うことが出来ませんでした。なので私は、人間や妖怪を忌避するようになったのです。近づいてしまうと死なせてしまうことを恐れたのです。

自分の能力を恨みました。自分の弱さを恨みました。自分の存在を恨みました。それでも、自分の力が消えることはありませんでした。恨むことは、結局マイナスにしかないのです。

そしてある日、一人の女性が私を訪れました。その時の私は一体どんな顔をしていたのでしょうか。ちよっぴり想像して、すぐにやめました。なんだかとても恥ずかしい顔だったことだけは覚えています。ずっと冥界のお屋敷にこもっていた私ですから、それはそれは驚いたなんてものじゃありません。それも、見たことも聞いたこともない女性ですよ？

「へえ、立派なお屋敷ねえ」

大きな傘を肩にかついで揺らしながら、女性は独り言のように言います。美しく透き通る、ガラス細工をそのまま声にしたような声でした。

私は恐怖に支配されていたのを覚えています。

近づいたら死なせてしまう、近づいてはいけない、近づかせてはいけない・・・狂ったお経のように、心の中で呟いていました。そんな私の気持ちは我知らず、女性はくるりくるりと傘を回しながら近づいてくるのです。

言いようのない恐怖が、頭のとっぺんからつま先まで電撃のように走り抜けました。ただ後ずさりしかできない私。そして。

・
・
・

いじわる妖精さんは決して、引かれた見えない線を踏み越えようとはしません。まるで、あの頃の私のように。

「ここの妖精さんたちが嫌い？」

私は言います。いじわる妖精さんは答えません。今度はいくら待っても答えを返してはくれませんでした。

「じゃあ、どうしていじめるの？」

さっき同じ質問でした。にもかかわらず、いじわる妖精さんは口をつむいだままなのです。

やっぱり、私と同じでした。

いじわる妖精さんは、決していじわるをして妖精さんを傷つけないのではないのです。言ってしまうえば、むしろその逆なのです。

私も、決して人間が、妖怪が嫌いな訳ではありませんでした。ただ、傷つけたくなかったから、仕方なくそれらと距離を置いていただけなのです。いじわる妖精さんも、きっとそうなのです。自分の桁外れの冷気で妖精さんたちを傷つけたくないから、こうして乱暴に追い払おうとしているのです。

とっても不器用な方法だな、私は思いました。同時に私も不器用だったんだな、と思いました。

私はゆらりゆらりと、いじわる妖精さんに近づいていきました。するといじわる妖精さんもまたゆらりゆらりと後退していきます。しかし、私は容赦しません。いじわる妖精さんは何かを恐れているようにまばたきを繰り返します。勿論私は止まりません。大きく腕を広げます。とてつもなく強力な冷気が伝わってきますが、お構いなしです。

「や、やめ・・・」

情けなくいじわる妖精さんはそう漏らします。私は大きく広げた腕を輪を作るように曲げ、そして。

「・・・!？」

いじわる妖精さんを抱きしめました。あの時、傘を持った女性がしてくれたのと同じように。

「ほら、何ともない」

いじわる妖精さんの体に私の肌が直接触れている部分がとても痛み

ます。髪の毛も凍り付いたように白銀をちりばめられ、抱擁する両手はまるで高温の鉄板に触れているような感覚です。

しかし、決して力は緩めません。いじわる妖精さんの小さな体をこの手で精一杯受け止めてやります。

「怖がらなくても、誰もあなたのこと嫌いになったりしない。だから、もつと素直になりなさい。妖精さんたちにも、自分にも」

突然温かいものが私の衣服を濡らしました。いじわる妖精さんの顔が埋まっているところです。どんなに体は冷たくても、心は温かい印のように思えました。

声を、私の衣服を噛み締めることで噛み殺しているのがよくわかります。それでも囁き泣く音が漏れてしまっています。そんないじわる妖精さんの姿を、昔の自分と照らし合わせてみたら、思わず微笑んでいました。

「あ、あの。チルノって言います。ええ、と・・・」

「よろしくね、チルノちゃん！」

たくさん妖精さんたちが、湖の真ん中に集まっています。その中心にはあのいじわる妖精さんの姿。もう、いじわるは止めになったそうです。

わいわいと賑やかな妖精さんたちが集まる湖。そこには小さな命と大きなやさしさが詰まっていました。どうやら、またいつも通りの平和な湖に戻ってくれたようです。

「あーら、流石は幽々子。あの妖精、もう仲間達に溶け込めたのね」

不意に、背後から声がした。

「やっぱり見ていたのね、紫」

「やっぱり？なんのことかしら？」

けろりとした表情の紫。幽々子は扇子を口にあてると目を緩める。

「あの妖精も、あなたがこの湖に誘導したんでしょう？」

「うふふふ、正解。よく分かったわね」

親指と人差し指で丸を作ってみせる紫。

幽々子は一問置いてから、

「・・・紫に出会ってから随分と経つのね。あれから何度、桜が咲いたかしら」

「まったくロマンチストなのねえ。いつもなら桜より桜餅のくせに」

「あら、今も桜餅の方が食べたいわよ」

言葉とは裏腹に幽々子の表情は憂いを帯びていた。天空を眺め、風に舞う散ってしまった桜の花びらをぼーっと眺めている。

「つくしゅん！・・・ううん、湖の上が寒かったせいかしら、ぶるぶる」

そんな憂いをごまかすよう、寒さにまかせて身を震わす。集まって

いた妖精達の姿はいつのまにか濃霧に隠されてしまっていた。

「・・・来年」

感情を一切込めず、幽々子は呟いていた。もうすぐ夏の到来である。

「うふふ、楽しみに待ってるわね」

言い残すと、紫は消えていた。ふう、と一つ、幽々子は息をつくと、

「・・・もう、恐れない」

そして、誰もいなくなった

（後書き）

この企画のお題は、チルノと幽々子と紫でした。まあこの三人をどうやって一つの小説としてまとめるのか四六時中頭を痛めていましたが、このような形で完結出来たのでよかったですと思います。最後まで読んで下さってありがとうございます。少しでもあったまっていただけでしょいか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5163f/>

きもち、ひんやりと

2010年10月21日20時42分発行